

[杭州、2010. 9.28]

## 戦争・記憶・想像力

### 一文禄の役（壬辰倭乱）をめぐって—

崔官（高麗大日本研究センター所長）

choigwan@gmail.com

#### 〈目 次〉

はじめに

1. 近世日本と文禄の役（壬辰倭乱）
  - 1-1. 初期記録類
  - 1-2. 朝鮮軍記物
    - 1-2-1. 初期記録類
    - 1-2-2. 太閤記物
    - 1-2-3. 朝鮮征伐記物
    - 1-2-4. 朝鮮軍記物の完成
  - 1-3. 戦乱の脚色—天竺徳兵衛物の場合
2. 近現代日本と文禄の役（壬辰倭乱）
  - 2-1. 近代日本と文禄の役（壬辰倭乱）
  - 2-2. 現代日本と文禄の役（壬辰倭乱）

終わりにかえて

#### はじめに

一六世紀末、大航海時代の波が東アジアに寄せよるなか、一五九二年四月から一五九八年一二月までの約七年間に及ぶ戦争が朝鮮において繰りひろげられた。豊臣秀吉の唐入りを名分にして朝鮮に出兵した日本軍に対し、国を守ろうとする朝鮮側と本国保全のために朝鮮に救援軍を派遣した明側が連合した戦いであった。戦場となった朝鮮の被った被害は甚大なもので、戦争以前の状態に戻るまでには百年近い年月を費やさねばならなかった。その後、日本では豊臣政権に代わり江戸幕府が成立し、中国の明は国力消耗による衰退・

滅亡の一因となる。このように東アジア世界を根本から揺るがした一大事件として、韓中日三国の歴史・社会・文化などの諸分野に大きな影響を残しており、特に日韓関係に限定すればその原点に位置している問題として今日にいたっている。

ところで、この戦争について日本では様々な呼び名がある。近世においては太閤或いは秀吉の唐入り、高麗陣、朝鮮陣、朝鮮役、征韓役、朝鮮征伐、三韓征伐などとされ、近代以後はそれらに加え、朝鮮出兵、文禄・慶長の役、朝鮮侵略などと呼ばれ、世界史の領域では豊臣秀吉の朝鮮侵略とも称されている。このように日本において定まった一つの用語がないということからは、時代や見方によって歴史認識が異なっていたということが窺える。その反面、中国では万曆朝鮮役、北韓（北朝鮮）では壬辰祖国戦争、韓国で壬辰・丁酉倭乱、一般的に壬辰倭乱（イムジンウェラン）と呼ばれてきた。本稿では、日本人読者の理解のために文禄の役（壬辰倭乱）とする。

この文禄の役（壬辰倭乱）に関して、これまで韓・中・日三国で数多くの記録や想像力に満ちた作品が数多く執筆されてきたが、管見によれば、それらについての総合的な研究はいまだ見当たらない。そこで本稿では、まず日本ではどのように記録され、どのように想像されてきたのか、ジャンルに拘らず、近世から現在までの展開様相を時代順に提示し、大きな流れをまとめることにしたい。

さて、本題に入る前に、まず日本で文禄の役（壬辰倭乱）についての記録がどのような背景をもってなされてきたのか、というところから考えてみよう。1598年秀吉の病死の後、在朝鮮日本軍は撤退し、日本の政局は権力紛争の渦中に巻き込まれていく。秀吉の後継者として残された、六歳にもならない豊臣秀頼を掲げた豊臣政権は急速に弱体化し、しだいに徳川家康と、秀吉の寵愛を受けた石田三成らとの対立構造が深刻化し、ついに関ヶ原の戦いが起こる。周知のように、この天下分け目の合戦は文禄の役（壬辰倭乱）に参戦した石田三成・小西行長らの武将が率いる西軍が惨敗するという結果となる<sup>1</sup>。実力で政局の主導権を掌握した家康は江戸幕府を開き、二回にわたる大坂の陣で豊臣政権を滅亡させ、徐々にその残存勢力を取り除いていく。また、生き残っていた九州勢の一部は、後の島原の乱で討ち死にしてしまうこととなる。

これらの一連の国内合戦で、九州や西日本の兵士が中心であった文禄の役（壬辰倭乱）参戦者の多くは破れた側に属していた。たとえば、島原の乱の総大将である天草四郎こと、益田時貞は、小西行長の部下だった益田甚兵衛好次の子として知られており、浪人となっ

---

<sup>1</sup> 笠谷和比古、黒田慶一『秀吉の野望と誤算—文禄・慶長に役と関ヶ原合戦』（文英堂、2000. 6）秀吉の朝鮮出兵がもたらした様々な政治的矛盾、朝鮮在陣大名同士の軋轢に起因する結果として関ヶ原合戦を捉えている。

た元小西隊や彼らの子孫が多数関わって、反乱を主導していたという<sup>2</sup>。たとえ、生き残ったとしても、急変する国内事情の下で、その戦乱を振り返って記録するにはままたらぬ状況であったと推測される。そのような理由もあり、文禄の役（壬辰倭乱）の直接体験者による記録は、延べ三〇万以上の兵士が朝鮮に出兵した長期戦であったことを考慮するならば、相対的に少ないといわざるをえない。

さらに、秀吉や彼の朝鮮侵略との無関係であると宣言して朝鮮との国交を回復した江戸幕府では、積極的に文禄の役（壬辰倭乱）についての記録を残そうとはしなかった。かえって、キリシタン関係のもの以外にも、家康とかかわる事件や実名を挙げることを禁止する出版取締令を次第に強化した。それゆえ、自然に文禄の役（壬辰倭乱）についての書籍も取締りの対象となり、関連作品が絶版に処せられたりしたことさえもあったのである<sup>3</sup>。

しかし、日本最初の海外征服戦争は容易に忘れることのできる性質の事件ではなかった。昨日の戦争相手国から今日の唯一の正式修交国となった朝鮮に対する認識が、他の国に対するのと同じはずではなかった。近世鎖国下において数十万人の朝鮮体験・日本に連行された数万からそれ以上ともいわれる朝鮮人の存在、そして度重なる華麗なる朝鮮通信使の来日などは文禄の役（壬辰倭乱）を意識させるものであった。実際、朝鮮通信使の来日の噂が立つと、文禄の役（壬辰倭乱）にかかわる朝鮮関連の人形浄瑠璃が作られ、上演されたりしたのである<sup>4</sup>。

結局、近世日本では、文禄の役（壬辰倭乱）に関する幕府の公式記録物がないまま、同時にその戦乱について知ろうとする民間の動きが統制された状況の中で、文禄の役（壬辰倭乱）の記録化・文芸化が進まざるを得なくなったのである。このような側面は文禄の役（壬辰倭乱）を記録した『朝鮮王朝実録』という正史・『徴毖録』という準正史をもつ朝鮮、『明史』・『神宗実録』という正史のある中国とは異なる日本の特色ともいえる。

## 1. 近世日本と文禄の役（壬辰倭乱）

### 1-1. 初期記録類

<sup>2</sup> 煎本増夫『島原の乱』（教育社、一九八〇）、八二～八九頁。

<sup>3</sup> 書名だけを挙げておくと、堀正意『朝鮮征伐記』、小瀬甫庵『太閤記』、これを改作した作品の一つである『絵入り太閤記』、竹内確齋『絵本太閤記』などは絶版に処せられた（宮武外骨『改定増補筆禍史』朝香屋書店、一九二六）。

<sup>4</sup> 享保四（一七一九）年、朝鮮通信使の来日を当て込んで上演されたものとして、近松門左衛門『本朝三国志』と紀海音『神功皇后三韓責』が知られている。

江戸幕府が豊臣政権の歴史を整理する意志を持たないことと同時に、幕府以外での整理活動も統制した結果、文禄の役（壬辰倭乱）に関する初期記録は、その成立時期が戦争直後ではなく、戦争期間中のものが圧倒的に多い。そのため、それらの記録はその規模や視野において大部分が断片的であり、狭小である。多くの場合、参戦武将の武勲や戦争体験についての聞書・覚書・手紙・報告書・日記・見聞談などの形態をもち、筆写本の形として存在している。

近世社会が安定することに伴い、特定の武将の家臣団（たとえば加藤清正の部下）や特定の藩（薩摩藩）では、朝鮮で活躍した主君や祖先の武功、あるいは自らの戦争経験を書きとどめようとする動きを受けての記録も現れた。

文禄の役（壬辰倭乱）に関する重要な初期記録を作者の身分や地位によって分類すると、これらの作者は、学識のある下級武士や従軍僧侶によるものが大多数であることが理解される。その主な初期記録類を掲げると次の通りとなる。

#### ①参戦武士系統

『吉野日記』	別名『吉野覚書』、松浦鎮信の部将である吉野甚五左衛門、文禄年間。
『高麗日記』	鍋島直茂の部将の鍋島平郎茂里の下で従軍した田尻鑑種、文禄年間。
『清正記』	別名『新板清正記』・『続撰清正記』・『加藤清正公記』、「清正記序」によると加藤美作守、下川兵太夫、古橋清助氏保の記録を氏保の息子の古橋又玄が編集したもの。
『木村又蔵覚書』	二巻二冊、別名『清正記』
『清正高麗陣覚書』	下川兵太夫、慶長年間。
『朝鮮渡海日記』	一冊、毛利家に属した吉見元頼傘下の下瀬頼直、文禄年間。
『朝鮮物語』	二巻二冊、別名『大河内物語』、太田飛驒守一吉の部下の大河内秀元、寛文二年自序。
『立花朝鮮記』	一冊、別名『天野源右衛門物語』、『立花宗茂朝鮮記』・『朝鮮南大門合戦記』、天野貞成、文禄年間。
『脇坂記』	二巻一冊、別名『脇坂家記』、寛永一十九年奥書。

\*その他『国書総目録』だけでも、「朝鮮陣覚書」などの「朝鮮陣〇〇」、あるいは「高麗〇〇」というタイトルを持つ記録が少なからず存在する。

#### ②従軍僧侶系統

『西征日記』	一冊、小西行長の従軍僧であった天荊、文禄元年。
『朝鮮日日記』	一冊、太田一吉の医僧の慶念、慶長三年。
『宿蘆稿』	一冊、吉川広家に従軍した宿蘆俊岳、文禄三年跋文。

さらに、これらの初期記録類を所属した部隊別に分類すると、そのなかから一つの傾向

を見出すことができる。ここでは書名だけ記しておく。

一番隊 (小西行長、宗義智、松浦鎮信ら)	『西征日記』『仙巢稿』『吉野甚五左衛門覚書』『宇都宮高麗帰陣物語』『朝鮮日日記』など
二番隊 (加藤清正、鍋島直茂ら)	『清正記』『清正高麗陣覚書』『清正朝鮮記』『高麗陣日記』『清正勲績考』『木村又蔵覚記』『朝鮮日々記』『朝鮮物語』『高麗日記』『鍋島直茂公譜』など
三番隊 (黒田長政、大友義統)	『黒田長政記』『黒田家譜』『魔釈記』など
四番隊 (島津義弘、毛利吉成ら)	『惟新公自記』『忠増渡海日記』『島津家高麗軍秘録』『面高連長坊高麗日記』『日新菩薩記』『征韓録』『川上久国雑記』など
五番隊 (福島正則、長宗我部元親ら)	『元親記』『福富覚書』『土佐物語』
六番隊 (小早川隆景、立花宗茂ら)	『立花朝鮮記』『立斎旧聞記』
七番隊 (毛利輝元、吉川広家)	『宿蘆稿』『朝鮮渡海日記』『高麗物語』『毛利秀元期』『吉田物語』『温故私記』『松井物語』『上山助右衛門高麗陣覚書』など
八番隊 (宇喜多秀家)	『戸川記』
水軍 (九鬼嘉隆、藤堂高虎、脇坂安治、加藤嘉明)	『志摩軍記』『脇坂記』『高麗船戦記』『高山公実録』『藤堂家覚書』など

これらを見ると、先鋒を務めた一番隊の小西行長についてはまともな記録がなく、相対的に二番隊の加藤清正についての関連記録が多いことが分かる。それは先述した関ヶ原の戦いや島原の乱による小西部隊の潰滅を反映しての結果であり、他方では江戸時代の加藤清正の人気をうかがわせるものでもある。特に、加藤清正については、一六四二年、幕府との政治的な軋轢による加藤家の断絶という事件が起こり、以後世間の同情を招くこととなる。その傾向は小西行長や石田三成の平価切下げと相まって、エスカレートしていく。ちょうどこの時期は戦争体験者がほぼ亡くなり、すでに次の世代が中心となった時点である。そのような意味から考えると、『清正記』のように、加藤家の家臣らによる数種類の参戦記録をそのうちの一人の子孫が集めて編集することができたというのも、一七世紀後半からの清正についての友好的な雰囲気を反映しているといえよう。そして、それらの記録は清正の武功や勇猛を語るばかりでなく、加藤清正臍臍的な、好意的イメージの形成につながり、ひいては加藤崇拜の傾向に寄与するようになる。

また、四番隊の島津家の場合は、『征韓録』の編集責任者である島津久通の言葉に、その編集意図がはっきりと表れている。『征韓録』のもつ特別な性格については、後述の「朝鮮征伐記物」において触れるので、ここでは編集の意図のみに触れておくことにしよ

う。「吾嘗て累代の勲徳を宣著せんと欲す。（中略）謹んで按ずるに近代吾が祖朝鮮征伐に従つて、武威を異域に振ひ、功業を邦家に立て、令名四海に遍し。」<sup>5</sup>云々のように、文禄の役（壬辰倭乱）での祖先の活躍ぶりを後代の子孫が宣揚しようとする目的から編纂したのだと明記している<sup>6</sup>。

このように初期記録類は、自己あるいは主君の武勲の誇示が主流であり、目的である。それらとは異なる立場から朝鮮での体験を事実的に書き記したものには従軍僧侶による見聞談があり、これらの記録は江戸時代においてほぼ忘れられてきたものだが、近年注目されている。

## 1-2. 朝鮮軍記物

初期記録類はもともと資料不足の上に、筆者本人や主君の経験の範囲内を対象とした制限的なものであるため、短篇的であり、戦乱全体から見ると、その範囲や視野に限界があった。そこで文禄の役（壬辰倭乱）の全貌を知ろうとする人々は、残された古文書や写本の形の短篇記録類を総合して新しい形態の文禄の役（壬辰倭乱）関連記録を作り出しはじめることとなる。本稿ではそのようにして生まれた文禄の役（壬辰倭乱）の全体像を描いた軍記作品群を総称して「朝鮮軍記物」<sup>7</sup>とする。

この朝鮮軍記物は次の三つの過程を経て成立したと捉えられる。

第一段階では、秀吉の一代記を描いた「太閤記物」の中の重要な構成要素として、文禄の役（壬辰倭乱）七年間の全体様相が整理された。代表的な作品は小瀬甫庵『太閤記』である。

第二段階では、『太閤記』での秀吉一代記の一部分という性格を脱して、もっぱら文禄の役（壬辰倭乱）だけを取り扱った「朝鮮征伐記物」が登場する。代表的な作品は堀正意『朝鮮征伐記』であり、そこには中国側資料も使われている。

第三段階では、一七世紀末に朝鮮側の資料である『懲毖録』が伝わり、戦争相手国の動きを捉えた、名実ともに完全な形の「朝鮮軍記物」が成立する。『朝鮮軍記大全』と『朝鮮太平記』の刊行がその象徴的な例である。

<sup>5</sup> 島津久通『征韓録』『戦国史料叢書 島津史料編』（新人物往来社、一九六六）、三二一頁。

<sup>6</sup> 島津家は戦功の誇示に力を注いだらしく、戦争直後、朝鮮の四川戦闘で討ち死にした明軍を供養するという名目で高野山に「高麗陣敵味方供養碑」を建てたが、碑文の内容は供養だけでなく、その戦闘で殺害した敵兵を八万余とするなど、島津家の功勲が大きく誇張されている。

<sup>7</sup> 文禄の役（壬辰倭乱）関連の初期短篇記録類も広い意味での朝鮮軍記物に含まれるが、本稿ではその戦争の全体様相を取り扱っているものを本格的な朝鮮軍記物と見なしたい。参考に、中村幸彦は「朝鮮軍記物」（『日本古典文学大辞典』岩波書店、一九八六）で、豊臣秀吉が文禄二年（一五九三）と慶長元年（一五九六）に、大軍を朝鮮国に送って戦った朝鮮の役の実録小説体である、と定義している。

それでは、第一段階の「太閤記物」から見てみよう。

### 1-2-1. 太閤記物

武将の武勲を記す流れのなかで、秀吉についての記録は一般武将たちに関する記録とは異なる、いくつかの特徴がある。秀吉は一武将という枠を越えた日本の統治者であったため、彼についての記録もその数、内容、規模などにおいて他の武将のものとは比べにならないほど種類が多く膨大である。文禄の役（壬辰倭乱）についても、一般武将の記録では自らに関わる戦闘や事件だけが記されているが、文禄の役（壬辰倭乱）の七年間とその前後の事情が秀吉の生涯の後半部を占めていることから、秀吉についての記録にはどのような形であれ、文禄の役（壬辰倭乱）の全体像について触れざるを得なかったのである。

まず、秀吉について描いた、いわゆる「太閤記物」は以下の通りである。

- ・『天正記』：十二巻（現存8巻）、別名『秀吉事記』・『豊臣記』、大村由己。
- ・『大かうさまくんきのうち』：一卷一冊、別名『天正事録』・『太田牛一筆記』、太田牛一、慶長九年頃。
- ・『川角太閤記』：五巻五冊、川角三郎右衛門、元和年間。
- ・『太閤記』：二十二巻二十二冊、小瀬甫庵、寛永二年自序、寛永十年刊行。
- ・『豊鏡』：四巻二冊、竹中重門、寛永八年。
- ・『豊臣秀吉譜』：三巻三冊、林羅山、寛永十九年自跋。
- ・『太閤真蹟記』：一二編三六〇巻、別名『真書太閤記』、白栄堂長衛、天明七年以前。
- ・『絵本太閤記』：七編八四冊、武内確斎作、岡田玉山絵、寛政九～享和二年刊行。
- ・『絵本豊臣勳功記』：九編九十冊、八功舎徳水作、歌川国芳・松川半山絵、安政四～明治十七年刊行。

このような多くの「太閤記物」のなかに、江戸初期に秀吉と関連して文禄の役（壬辰倭乱）の全体像を描こうとしたものが現われた。それが寛永十（一六三三）年に刊行された小瀬甫庵『太閤記』である。小瀬甫庵は、『天正記』の筆者である大村由己のように主君の功績を宣伝する御伽衆の立場ではなく、儒学者としての歴史認識に基づいて、秀吉一代記である『太閤記』を著した。太田牛一の『大かうさまくんきのうち』や『豊国大明神臨時御祭礼記録』などの初期記録を総合し、文禄の役（壬辰倭乱）に関してもできる限りの資料を集めたようである。甫庵『太閤記』は幅広い人気を集め、後の秀吉関連作品群は一括して「太閤記物」と呼ばれるようになり、後代の「太閤記物」は多かれ少なかれ甫庵『太閤記』の影響下にあるといえよう。文禄の役（壬辰倭乱）との関連をみると、甫庵は

文禄の役（壬辰倭乱）に参戦したことの無い人物ではあるが、彼の『太閤記』は文禄の役（壬辰倭乱）の全体的な流れを整理した日本最初の作品として重要な意義がある。個人の作業であったことから資料収集の限界や、恣意的な資料の取り扱い、そしてなによりも戦争の相手国であった朝鮮や明側の情報の無さという問題点はあるものの、『太閤記』で初めて整理された文禄の役（壬辰倭乱）全史は、後の関連作品に大きな影響を及ぼしている。

甫庵『太閤記』は、以後、おおよそ三つの方向へ展開していく。『太閤記』異本の形成、『豊臣秀吉譜』などの「太閤記物」の形成、そして講談の台本としての使用である。『太閤真蹟記』のような実録体小説は講談での秀吉の話を記録したものであり、このような講談の流れと甫庵「太閤記物」の流れを総合しようとする意図で作られたのが江戸後期に広く読まれた『絵本太閤記』である。七編で構成される『絵本太閤記』は、五編までは『太閤真蹟記』を主として、他の「太閤記物」を参考にして作成されており、文禄の役（壬辰倭乱）を描いた六・七編では、後述する『朝鮮征伐記』や朝鮮の『懲毖録』などの多様な資料が用いられている<sup>8</sup>。

ここで注目したい点は「太閤記物」と「朝鮮征伐記物」との影響関係である。甫庵『太閤記』と『朝鮮征伐記』とを比較してみると、具体的な記事が一致している部分は多くないにもかかわらず、戦争の開始から終結までの全体を叙述しようとする意図や、晋州城攻防戦・碧蹄館の戦い・蔚山籠城などの主な合戦の叙述に見られる日本中心主義的な観点は共通している。これはこれまで「太閤記物」をもっぱら秀吉の一代記的な作品群としてばかり認めてきたのとは異なり、「太閤記物」から「朝鮮征伐記物」と繋がり、さらにそれが「朝鮮軍記物」という巨大な流れを成す初期作品群として位置づけられうる可能性があることと指摘しておきたい。このような側面からみると、『太閤記』が「朝鮮征伐記物」の成立に刺激を与えたという桑田忠親の言及<sup>9</sup>は重要な意味があると思われる。このように『太閤記』は『朝鮮征伐記』と影響関係があり、また『朝鮮征伐記』は『絵本太閤記』に影響を与えるなど、二つの系統の相互関連性はこれまで知られていたことよりも深いといえよう。

<sup>8</sup> 『朝鮮征伐記』と『絵本太閤記』との影響関係は記事の内容を比較することで明らかである。たとえば、『朝鮮征伐記』八巻と『絵本太閤記』七編八巻の明軍の名簿、『朝鮮征伐記』九巻と『絵本太閤記』七編十二巻の耳塚についての記事はほぼ同じ内容であるのが分かる。また全体的な叙述において、『朝鮮征伐記』四・五巻と『絵本太閤記』六編十巻から七編五巻までにみられる〈秀頼の誕生→秀次の死・日明会談の決裂→朝鮮再侵略〉という構図も一致している（金時徳「『太閤記』と『絵本太閤記』との比較研究」高麗大学校修士論文、二〇〇二）。

<sup>9</sup> 桑田忠親校訂『太閤記』（岩波書店、一九八四）四三頁。



## 1-2-2. 朝鮮征伐記物

文禄の役（壬辰倭乱）についての包括的理解の面において、「太閤記物」は初期の短篇記録類より明らかに優位に立っている。しかし、文禄の役（壬辰倭乱）を全体的に記した甫庵『太閤記』でさえ、資料の限界とそれによる視野の狭小さは避けることができなかつた。このような意味で甫庵『太閤記』より二十余年後に刊行された『朝鮮征伐記』（九卷九冊、後版の大和屋版に「堀正意輯録」となっている。万治二年刊行）はいくつかの面で画期的な作品である。

まず、『朝鮮征伐記』は、『太閤記』で秀吉一代記の一部として存在していた文禄の役（壬辰倭乱）を、独立した戦争史として全面に浮き彫りにした最初の作品であるといえる。次に、小瀬甫庵が資料収集の限界を補うために『太閤記』で頻繁に資料を改作したのに対し<sup>10</sup>、『朝鮮征伐記』では多くの資料を総合した以上のことは行われなかつたように見受けられる。文禄の役（壬辰倭乱）についての叙述も、比較的实际の戦争の展開様相と一致している。三つめは、『朝鮮征伐記』は中国側の資料を参考にしたと見られるといった特徴が指摘できる。これは『朝鮮征伐記』が客観性を獲得しえきた要因と関わることであり、内容的に明軍の動きに詳しく、明朝廷内の動きや明軍の構成や人名など、中国側資料によらないと書けない箇所が数多く存在する。

『朝鮮征伐記』が中国側資料を頼りにしたと推測できる根拠はいくつも存在する。『太閤記』などの以前の記録では、日本式に呼ばれている朝鮮の地名以外に交渉に関わっていた何人かを除いては、ほぼ明や朝鮮側の人名は空白状態となっていた。それに比して『朝鮮征伐記』では、明側の武将名や配置、動きなどが詳細かつ正確に記されている。その反面、朝鮮側の人名などは乏しく、出ていても朝鮮資料での一般的な名称とは異なっている。たとえば、日本水軍を連戦連破した朝鮮の名将である李舜臣を単に「李統制」とだけ表記していることに見て取れよう。また、日本を見下す言葉であり、日本人が好んで使わないはずの「倭」という字が散見される。他にも、戦争のさなか、小西行長が遣わした日本の使臣である内藤如案に対して、明の朝廷で行われた尋問の内容がそのまま載せられている。特に、中国側の文禄の役（壬辰倭乱）の記録である諸葛元声の『両朝平壤録』とほぼ一致している記事もあることから<sup>11</sup>、中国側資料を编者である堀正意が入手したことは間違い

<sup>10</sup> 『太閤記』での資料改作については早くから論難されてきた。柳沢昌紀「『太閤記』朝鮮関連記事の虚構一日付改変の様相をめぐって」『近世文芸』65号（日本近世文学会、一九九七・一）に詳しい。

<sup>11</sup> 『朝鮮征伐記』の「朝鮮国始末之事」や「日本両使朝筆談の事」などと『両朝平壤録』の記述との間には顕著な類似性を見出すことができる。一六〇六年に刊行された諸葛元声の『両朝平壤録』が島津久通の『征韓録』（一六七一年自跋）に引用され、また松下見林の『異称日本伝』（一六八八年序）にも

ないと判断されるが、中国本の詳しい流入経路や堀正意との直接的な関わりについてはいまだ究明されていない<sup>12</sup>。

『朝鮮征伐記』刊行から十二年後に成立した島津藩島津久通『征韓録』（寛文十一年自跋）には、中国の『武備考』と『両朝平壤録』の書名とその引用が明記されている。すでにこの時点では、確かに中国側資料が流入されていたのがわかる。

とにかく、『太閤記』より一步進んだ内容をもつ『朝鮮征伐記』は、以後「朝鮮軍記物」の展開に大きな影響を及ぼすこととなり、その直接・間接的な影響の下で「朝鮮征伐〇〇」という書名のついた一連の作品が現われる。また「朝鮮征伐記物」に関するが、朝鮮軍記物が完成した十八世紀の以後のものは朝鮮軍記物と同じく見なしてかまわないと考える。

- ・『朝鮮征伐記』：九巻九冊、初版の田原版には編者名はなく、後版の大和屋版に「堀正意輯録」となっている。万治二年刊行。
- ・『増補朝鮮征伐記』：四二巻四二冊、別名「朝鮮軍談実録」、宇佐美（大関）定祐、堀正意『朝鮮征伐記』と区別して大関『朝鮮征伐記』ともいう、寛文五年序。
- ・『朝鮮征伐軍記講』：二七巻または三十巻、大阪の講釈師畑本次の講談により節斎散人編、宝暦八年。
- ・『朝鮮征伐記評判』：二四巻四冊、『朝鮮征伐軍記講』と同じ頃。
- ・『絵本朝鮮征伐記』：二編二十巻、鶴峯戊申編、橋本玉蘭画、前編嘉永六年・後編安政元年刊行。

ちなみに、島津藩島津久通『征韓録』は島津義久の武勲を中心にして描かれたものというものの、初期の短篇記録類と性格が異なっている。他の武将の動きや文禄の役（壬辰倭乱）の全体を取り扱おうとしている点、そして中国側資料を引用している点などから「朝鮮征伐記物」の範疇に入れて捉えたい。

### 1-2-3. 朝鮮軍記物の完成

---

載せられていることから、十七世紀後半には日本に流入していたと考えられる。

<sup>12</sup> 『朝鮮征伐記』編者である堀正意（杏庵）は林羅山・松永尺五・那波活所とともに藤原惺窩門の四天王に数えられた人物であり、林羅山との親密な交流関係にあったという点を考慮すると、幕府の文書をつかさどっていた林羅山側から入手した可能性が考えられる。ちなみに、堀正意の死後に刊行された点、また初版には編者名はなく、後版の大和屋版に「堀正意輯録」となっていることから、堀正意を実際の編者とするのに疑問の声もある。これらの点については諸先生のご教示を賜りたい。

ところが、十七世紀末、朝鮮軍記物の展開において、画期的な変化をもたらした朝鮮側資料が流入・流布することになる。元禄八（一六九五）年、京都の大和屋伊兵衛から朝鮮の準正史にあたる柳成龍（リュ・ソンリョン）の『懲毖録』が和刻本として刊行されたのである。『懲毖録』はすでに、元禄六（一六九三）年に刊行された松下見林『異称日本伝』（元禄元年序）にも抜粹本として紹介されていたことから、それ以前に日本に流入していたと考えられるが、伝来経路については究明されていない。ともあれ、この時点で日本は「朝鮮征伐記物」にみられるような中国側資料の流入に引き続き、戦争相手の朝鮮側の重要資料も手に入れるようになったのである。

ここで、日韓両国で文禄の役（壬辰倭乱）を語る際の不可欠の基本資料であり、朝鮮軍記物の成立に決定的な役割を果たした柳成龍『懲毖録』についてまとめておきたい。

柳成龍は文禄の役（壬辰倭乱）期には朝鮮朝廷の最高官職である領議政にまで昇進して戦いを統括してきた人物であるが、戦争終結直後、都落ちして、戦争の顛末や自らの見聞などを冷静な視点で批判的に記録したのが『懲毖録』である。『懲毖録』という題目が『詩経』の「予、それ懲りて、後の患を毖む」に由ることからもわかるように、そこには悲劇的な文禄の役（壬辰倭乱）の内幕を明らかにし、後世への戒めにするための憂国忠誠の心情が歴々と表れている。内容は開戦の数年前に秀吉の使者を称した橘康広が訪問した際の彼の言動や通信使派遣の要請から始まり、日本軍の侵攻によるソウルの陥落と国王の避難過程、明からの救援軍と朝鮮・明の反撃、日明交渉のこと、日本軍の再侵略と撤退までにわたっている。また、現在は朝鮮民族の最高の英雄と評価されている李舜臣（イ・スンシン）将軍や朝鮮義兵などの活動にも詳しく、特に、自分が抜擢した官位の低い李舜臣がどのように戦って勝利をおさめ、国家を滅亡の危機から救い出したのかが、具体的に記されている。そして、朝廷が李舜臣に対して与えた試練を感動的に叙述し、李舜臣の壮烈な戦死をもって『懲毖録』を終えている。

客観的な戦争記録であると同時に著者の歴史認識が盛り込まれている本書は、まず「草本懲毖録」（一六巻本）ができ、その次に二巻本の順に展開してきた。一六〇四年以前の成立であることは判明しており、一六四七・四八年頃に刊本が出たという記録が残されている。

ところで『懲毖録』は刊行されてまもなく日本にも伝えられたようである。元禄元（一六八八）年の自序があり、元禄六（一六九三）年に刊行された松下見林『異称日本伝』（三巻十五冊）の下之四に二巻本が載せられているところから見て、少なくとも一六八八年以前には日本に流入したと考えられる。その後、元禄八（一六九五）年正月に京都二条

通の大和屋伊兵衛から当代の儒学者である貝原益軒の序文と朝鮮地図を付け加え、二巻本を底本とした四巻本『懲毖録』が刊行される<sup>13</sup>。

この和刻本『懲毖録』は、戦争の実相を求めてきた近世日本社会に大きな知的衝撃を与えることとなる。日本において李舜臣の名声が知られるきっかけとなり、著者である柳成龍は、浄瑠璃でも朝鮮第一の臣下として登場するようにもなったのである<sup>14</sup>。

ともかく中国側資料が取り入れられた『朝鮮征伐記』に続いて、朝鮮の『懲毖録』が刊行されることによって、戦争当時の朝鮮側の事情や戦闘の内幕、人名、部隊配置などを正確に捉えることが可能となったのである。この時点で日本は、文禄の役（壬辰倭乱）についての情報や資料に関しては、中国や朝鮮より優位に立つこととなる。百年間続けて追求めてきた文禄の役（壬辰倭乱）の全貌がわかることになり、ついに朝鮮軍記物が完成されたのである。

朝鮮軍記物で記述される朝鮮側の動きは『懲毖録』からほぼそのまま引用されるようになり、既存の『朝鮮征伐記』などの記録と合わせ、分量が大幅に増大していく。そのような変化の結果として現われたものが、『懲毖録』刊行後の十年目に刊行された大作『朝鮮太平記』（三十巻目録一卷三冊、馬場信意、宝永二年刊行）と『朝鮮軍記大全』（三八巻付録二巻二十冊、姓貴、宝永二年刊行）である。『朝鮮太平記』の著者である馬場信意は軍記物作者として多くの作品を残しているが、『朝鮮軍記大全』の著者の姓貴については僧侶であろうと推測するだけで、いまだ不詳のままである。文禄の役（壬辰倭乱）に関する総結集ともいえるこの両作品が『懲毖録』の影響下にあるということは、たとえば、『朝鮮太平記』巻三十の「鄧子竜李舜臣事」および『朝鮮軍記大全』巻三十の「李舜臣戦死事」を合わせみるだけでも明白である。先述したように『朝鮮征伐記』では李舜臣が「李統制」という官職として記されていたが、両作品には李舜臣という正確な名で記されている。『懲毖録』により、近世日本人は文禄の役（壬辰倭乱）最後の海戦で活躍した朝鮮武将の名前が李舜臣であることを知るようになり、しだいにその名が広がるようになっ

<sup>13</sup> 『懲毖録』の日本での刊行は朝鮮朝廷内で国家機密の流出という問題を引き起こし、日本への書籍流出を禁止するなどした。一七一九年に朝鮮通信使の一行として日本を訪問した申維翰は、大坂の書店で『懲毖録』などの壬辰倭乱に関わる朝鮮書籍を見つけた時の嘆きの心境を、彼の日本紀行文である『海游録』に、次のように書き記している。「もっとも心を痛めたのは、金鶴峯の『海槎録』、柳西厓（成龍）の『懲毖録』、姜睡隱の『看羊録』などの書には、両国の隠情が多載されているのに、今そのすべてが大坂で梓行されていることである。これ、賊を探りながら賊に告げると、なにが異なるのか。国家の紀綱が厳ならず、館訳の私的取引がかくの如くである。人をして心寒からしむるものがある。」申維翰『海游録』（東洋文庫、一九九一）二四五頁

ここに挙げられている金鶴峯（金誠一）『海槎録』は一五九〇年の朝鮮使節団として秀吉を訪問した際の日本紀行文であり、姜睡隱（姜沆）『看羊録』は日本で捕虜生活をした時の見聞談である。

<sup>14</sup> たとえば、近松半二の浄瑠璃『山城の国畜生塚』（一七六三年）の登場人物に「朝鮮第一の臣下柳成龍」とあるが、それは『懲毖録』が日本で刊行され、そのなかに込められている柳成龍の忠君愛国の精神を作者が認めたからであろう。

たのである。また、李舜臣の戦死に関する記事をもって大団円をなしている『懲毖録』の構図も『朝鮮太平記』と『朝鮮軍記大全』に受け継がれ、李舜臣の戦死記事が各々作品のほぼ大詰めに位置している。

このように、朝鮮征伐記物の流れの上に『懲毖録』が紹介され、その影響の下で十八世紀初には「朝鮮軍記物」が名実ともに完成された形として現われている。

主な朝鮮軍記物は次の通りである。

- ・『朝鮮太平記』：三十巻目録一卷三一冊、馬場信意、宝永二年刊行。
- ・『朝鮮軍記大全』：三十八巻付録二巻二十冊、姓貴（未詳）、宝永二年刊行。
- ・『朝鮮征伐軍記講』：二十七巻または三十巻、節斎散人、宝永八年成立。
- ・『朝鮮征伐記評判』：二十四巻四冊、宝永八年頃成立。
- ・『絵本朝鮮軍記』：十巻十冊、秋里離島、寛政十二年刊行。
- ・『絵本朝鮮征伐記』：二編二十冊、鶴峯戊申編、橋本玉蘭画、前編嘉永六年・後編安政元年刊行。
- ・『朝鮮征討始末記』：四巻首一卷五冊、山崎尚長、嘉永七年刊行。

これらの朝鮮軍記物の完成にいたって日本では文禄の役（壬辰倭乱）についての総合的かつ客観的な事実への経路が開かれ、同時期の朝鮮や中国よりも深度ある理解が可能になったわけである。しかしながら、これらの一連の作品には依然として『太閤記』から引き継がれてきた、強い日本中心主義的な視角が内在している。この相反する両側面、すなわち事実性の追求と日本型華夷意識をベースとした視角という矛盾する様相は、朝鮮軍記物にとどまらず、ひいては明治以後の文禄の役（壬辰倭乱）についての認識や研究にまで継承されていく。この点については近代日本と文禄の役（壬辰倭乱）で後述することにした。

### 1-3. 戦乱の脚色—天竺徳兵衛物の場合

「朝鮮軍記物」に象徴される文禄の役（壬辰倭乱）についての史実追求とは別に、朝鮮軍記物が完成した一八世紀以降には、戦乱の脚色という新たな動きが現れる。既に戦乱が終結して百年余りが経っており、大多数の日本人にとって、文禄の役（壬辰倭乱）は漠然としたイメージでしか残っていなかった。したがって、特別な事件や戦争ヒーローが虚構化され、特定のイメージのみが強調される傾向が生じたのであろう。今日までよく知られている加藤清正の虎狩りがその一例だといえよう。

とりわけ近世庶民劇である歌舞伎、人形浄瑠璃などの作品にこのような虚構化の特徴を見ることができるが、それらには朝鮮の武将が日本の武将に残酷に殺されたり、日本に渡って日本転覆を企む謀反人や妖術人として脚色されて登場している。現在までに明らかになったところによれば、その代表的な人物は「木曾官（Mokusokan）」という人物である<sup>15</sup>。

「木曾（Mokuso）」とは朝鮮時代の官職「牧使（モクサ、地方拠点である牧の責任者）」から来た言葉で、当時、晋州（朝鮮南部都市）牧使であった金時敏（キム・シミ）を指している。彼は判官（牧使配下の役人）から牧使へと昇進し、一五九二年一〇月の第一次晋州城攻防戦を勝利に導いた。この攻防戦は破竹の勢いで朝鮮半島を席卷していた日本軍に陸戦で初めて喫した大きな惨敗として、日本側に大きな衝撃をもたらした。一方、牧使・金時敏は最後の戦いで撃たれて間もなく死ぬが、牧使の死を知らなかった日本側では李舜臣（イ・スンシン）将軍よりも有名な朝鮮最高の猛将として知られるようになる。翌年の秀吉の厳命による総攻撃を受けてついに晋州城は陥落し、牧使も捕らえられて京都で「モクソ」という名で晒し首になるが、それは金時敏ではなく、朝鮮の卑怯者である後任牧使であった。

そして、その事件から一二〇年も過ぎてから近松門左衛門の浄瑠璃に登場することになる。

[高麗國] 遼東大王。都を。日本に切<sup>(取)</sup>とられ平安。道に落のび給へは。李郎耶兄弟追付奉り。とくねぎの城せめとられ。柱と頼しはんぎやんも行がたしらす。かうらい一國に玉体をよ<sup>(寄)</sup>せらるへき方もなし。

かうらいのもうしやうはんぎやんきつちうの岡に陣をはり。(中略) 大將牧司<sup>(怒)</sup>いかりをなし。八角の鉄棒水車<sup>(振)</sup>にふり廻し。あたる者をさいわひに八方むじん<sup>(無盡)</sup>に打ひしげば。小西彌十郎飛かゝつて。ひつつかんでどうとなげ。せぼねをふまへく<sup>(首)</sup>びをかゝんとせし所へ。加藤正清<sup>(遼東)</sup>れうとう大わうをいけどり一さん<sup>(王)</sup>に<sup>(生捕)</sup>かけ来る。(中略) かつたうこ<sup>(小西)</sup>にしもくそがりやうそく<sup>(牧司)</sup>両方<sup>(兩足)</sup>へ引<sup>(張)</sup>はつて。ヤア<sup>(二)</sup>ぬいへふたつにさつとう<sup>(鬮)</sup>なぎをとくより<sup>(易)</sup>やすかりけり。(『本朝三國志』)

これは、一七一九（享保四）年二月一四日、大坂竹本座で初演された近松の『本朝三國志』からの引用である。本作は、この年秋に訪れる朝鮮通信使の噂を当て込んだ作品とし

<sup>15</sup> 拙著『文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）』（講談社メチエ選書、一九九四）に詳しい。

て、「太閤記物」の諸作の嚆矢として注目に値する。

その五段で、秀吉は朝鮮での合戦に勝利を得て、京都に耳塚を築き、その供養の日に御前あやつり「男神宮皇后」を観覧する。「男神宮皇后」は朝鮮での様子を操芝居にして諸人に見せるものだが、そこで「牧司判官」として木曾官が現われる。引用文のように、朝鮮の柱となる猛将として活躍したモクソ（牧司）は、ついに加藤と小西によって悲惨な最期を迎えたと描かれている。近松によって脚色された「モクソ」のイメージは近世芝居のなかで新たに変容していく。

近松の『本朝三國志』から約半世紀が過ぎると、晋州牧使は「もくそ（木曾）官」という名で、日本への怨恨に満ちた謀反人となり、再び浄瑠璃に登場する。

宗観。ぞく小踊して。ヲ、其を見るからに。今打明かす某は。朝鮮国の臣下木曾官と  
いつし者。國の怨を報はん爲此日本に押し渡り。曾呂利新左衛門と姿を略し。將軍に  
は近か寄れ共。久次が謀計に落入て。（中略）ふたゝび近か寄るもなく此上は授り得  
たる蝦蟇の妙術。（中略）汝〔天竺徳兵衛〕所持して謀叛をおこし。主の怨。國の仇。  
三十年來心を碎く父が存念。晴さんず者外になし。（『天竺徳兵衛郷鏡』）

これは一七六三（宝暦十三）年四月、大坂竹本座で上演された、近松半二らの『天竺徳兵衛郷鏡』第二段目の宗観館の場で、吉岡宗観（正体は木曾官）が切腹しながら、実子の天竺徳兵衛に國の仇を報ずるよう遺言している場面である。木曾官は日本に怨みを抱き、日本に渡っては幕府を転覆しようとする悪人の妖術使いとして脚色されている。日本への謀反人として、秀吉の侵略でもっとも被害を受けた国、朝鮮国の臣下であり、熾烈だった晋州城攻防戦の末に捕えられ、日本で晒し首になったと思われる「木曾官」を、仇討ちの主としている。近世の伝説的な人物である天竺徳兵衛は、本作では父の木曾官の遺言と妖術を譲り受け、それを使って謀反への道を歩んでいくのである。つまり、朝鮮侵略に対する怨みを抱く朝鮮武将の執念が、謀反劇を動かす原動力として働いているのである。

このように朝鮮武将木曾官の息子である天竺徳兵衛を主人公にして、幕府を転覆しようとする一連の作品群、いわゆる「天徳物」は、趣向を変えながら続けて上演された。天徳物の最初の作品である『天竺徳兵衛聞書往来』で正林賢の子として登場し、『天竺徳兵衛郷鏡』以後には木曾官の子となり、鶴屋南北の出世作として有名な『天竺徳兵衛韓漸』を経て、明治以後には『音菊天竺徳兵衛』という演目で今日まで上演されている。

一方、木曾官と天竺徳兵衛に関するもの以外にも、文禄の役（壬辰倭乱）関連の劇作品が現われた。梅野下風などによる浄瑠璃『彦山権現誓助剣』（一七八六年閏一〇月一八日、

大坂道頓堀東の芝居初演、「陣営は九州、地理は八道（朝鮮八道を表す）」という角書あり）は、主人公の毛谷村六助が秀吉の承認を得、舅の仇討ちをしてから加藤清正の家臣となり、朝鮮へ出陣しようとするところで終わる。この他にも、壬辰倭乱を取り扱った劇作品があるが、未だにその全体像が明確になっていないというのが現状である<sup>16</sup>。これまでの研究をもとに言及すれば、文禄の役（壬辰倭乱）関連の劇作品は、木曾（晋州牧使の金時敏）を代表的な悪人とし、その息子の天竺徳兵衛が謀反人となる系列と、朝鮮で戦死した毛谷村六助に関する系列、その他に分類することができる。

## 2. 近現代日本と文禄の役（壬辰倭乱）

### 2-1. 近代日本と文禄の役（壬辰倭乱）

近世日本で基本的に日本型華夷意識をベースとして日本武将の武勲を強調しながらも、同時に客観的な事実を捉える方向へ進んでいた朝鮮軍記物の成立と刊行、そして人形浄瑠璃・歌舞伎で特定の武将やイメージを変容する系統という二つの流れから文禄の役（壬辰倭乱）の文芸化を捉えることができるといえる。

このように朝鮮軍記物であれ、劇作品であれ、これらの異民族との戦いを描いた作品は、幕藩体制の枠のなかで生活する人々に藩のカテゴリーを超えた近世ナショナルアイデンティティを刺激し、日本中心の優越意識をもたらしたともいえるのではなかろうか。そのような側面は明治維新後の国家イデオロギーと結びついて、朝鮮に対する認識や政策に影響を及ぼすようになる。生きている歴史としての文禄の役（壬辰倭乱）の再登場である。

明治時代初期から、大陸進出の野心を露わにした征韓論（近代朝鮮侵略論）や日清戦争などにより、文禄の役（壬辰倭乱）は政治・軍事的な意味において再注目されはじめた。それと同時に、様々な朝鮮軍記物が活字化され、刊行されるに至った。その後、一八九八年に明治政府は豊臣秀吉死後三〇〇周年を記念する事業を大々的に展開し、秀吉を英雄化する積極的な立場を見せた。庶民から立身出世し、最高の地位にまで昇りつめた人物としてだけでなく、日本の武威を東洋に轟かせた人物として、日本帝国主義の拡大政策を歴

<sup>16</sup> 文禄の役（壬辰倭乱）関連劇作品の題だけ提示すると次の通りとなる。

『仮名草紙国性爺実録』（一七五九）、『傾城勝尾寺』（一七六一）、『傾城桃山錦』（一七六八）、『容競唐土噺』（一七六八）、『九州与次兵衛灘』（一七七一）、『三千世界商往來』（一七七二）、『韓和聞書帖』（一七七八）、『唐錦艶書功』（一七九四）などのように一八世紀後半に多くの作品が上演されていた。



史的に裏付けする人物として秀吉は崇拜の対象となるのである。これによって文禄の役（壬辰倭乱）も、いわゆる秀吉の大陸征伐という遠大な抱負を実現するための一つの事件として評価され、太閤様の一伝記の中の一事件、つまり、「太閤の朝鮮征伐」或いは「太閤の唐入り」として捉える傾向が近代日本社会に深く根を下ろすことになる。

まず、『征韓録』と「征韓論」との連関性から見てみよう。『征韓録』と「征韓論」は発生した地域が同じ薩摩藩であり、明治維新の立役者である西郷隆盛、大久保利通との関連も指摘できる。征韓論を背負っていた西郷隆盛、江華島事件の担当者である大久保利通は、文禄の役（壬辰倭乱）の際に朝鮮に出兵した島津家の武勲を宣揚する教育を受けた立場に立つ。薩摩藩の下級武士の家に生まれた西郷と大久保は、幼少のときから藩校の郷中教育で、藩主の朝鮮での活躍やその正当性について教わりながら成長した。そこで行われている五つの科目の中に暗誦物があるが、その暗誦物には「虎狩物語」と「歴代歌」という文禄の役（壬辰倭乱）に関連するものがと中心をなしている。また島津義弘が朝鮮出陣の直前に自ら作って神社に捧げた踊が残されているなど、薩摩藩にとっての「征韓」というイメージは自負心の象徴として十七世紀の『征韓録』と十九世紀の「征韓論」に響いているといえよう<sup>17</sup>。

「征韓」という認識は、遡ればいわゆる「神功皇后の三韓征伐」から始まり、元・高麗の日本侵攻後の書籍に露骨に現われている。さらに、朝鮮軍記物などには、神功皇后の三韓征伐以来の朝貢国であった朝鮮が、日本の戦国時代の混乱を口実にして貢物の献上を怠ったため、その懲罰として秀吉の朝鮮征伐が敢行された、という理屈としてよく見られる一般化された認識である。特に、そのような教育を受けていた多くの薩摩藩出身者にとって、朝鮮は単なる隣国ではなく、「征韓」と結びつきやすかった面があったのであろう。

征韓論は日本帝国主義の初期段階である朝鮮・清への進出時期に盛んに議論されており、同じ時期に朝鮮軍記物や文禄の役（壬辰倭乱）関連記録が活発に活字化され刊行されていた<sup>18</sup>。このような傾向は日本が朝鮮を併合し、帝国主義的な関心を朝鮮から東南アジアに

<sup>17</sup> 琴秉洞『耳塚』（総和社、一九九四）一三八～一四一頁

<sup>18</sup> 日清戦争が起こった一八九四（明治二十七年）年に刊行された、松本愛重輯『豊太閤征韓秘録 第一輯』（成歎社）は、『朝鮮征伐記』、『吉野日記』、『朝鮮南大門合戦記』、『西征日記』からできており、社告には次に刊行する目録を記している。朝鮮征伐記、朝鮮記、高麗陣日記、清正松雲問答録、高麗船戦記、高麗渡、小西一行記、本山豊前守覚書、立花朝鮮記、征韓録紹幽物語、朝鮮往還日記、増補朝鮮征伐記、竹内覚書、清正家などを次集以下に続々掲載せんとす。桜井義之『朝鮮研究文献誌 明治・大正編』（龍溪書舎、一九七九）六六頁

北島万次は『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』（校倉書房、一九九〇）二五頁で、時あたかも日清戦争勃発の直後であり、その緒言は「明治二十七年九月十七日 平壤大捷の報に接して松本愛重しるす」と結んでいる。『豊太閤征韓秘録』は日清戦争の戦意高揚に寄与する意味をこめてまとめたものといえよう。

また桜井義之『朝鮮研究文献誌 明治・大正編』によると、時代状況とくっついて明治期に多くの朝鮮軍記物や『懲毖録』がどのくらい活発に出版されていたのが分かる。特に、『懲毖録』は日韓、ある

移るときまで継続されたといえる。

また、江戸時代に初期記録類や朝鮮軍記物が筆写本・刊行本として流布されてきてはいたが、学問の対象として浮き彫りにされたのは明治時代である。その両時代の朝鮮軍記物の享有を連結したのは、水戸藩彰考館総裁であった川口長孺が一八三一年（天保二）に刊行した『征韓偉略』五巻五冊である。『征韓偉略』は史料批判を加えた上で、実証的に秀吉の「征韓偉業」を称えようとしたものとして、「近代史学史における秀吉の朝鮮侵略史研究に関する主たる仕事をみていく時、そのほとんどは川口長孺の叙述した筋書きをふまえ、それにあらたな視点を加えながら、『征韓偉略』を積極的あるいは批判的に摂取していった」<sup>19</sup>と評価されている。ここで注目したいのは、『征韓偉略』も朝鮮側の記述は『懲毖録』に依存していると共に、基本史料として『朝鮮征伐記』『西征日記』『征韓録』『両朝平攘録』などが含まれている点である。『懲毖録』は文禄の役（壬辰倭乱）を理解するための価値ある史料として認められており、初期記録類や朝鮮軍記物などをも同じくその価値が認められていたのがわかる。

このような認識はそのまま明治日本にも受け継がれ、初期記録類や朝鮮軍記物における虚構的要素までも「事実」として認める誤謬を犯す場合も現われるようになった。ここではその一例として、「北関大捷碑」についての古谷清の研究をあげておく。「北関大捷碑」とは文禄の役（壬辰倭乱）の際、咸鏡道吉州で加藤清正軍と戦って勝利した義兵将の鄭文孚の功績を称えるために建てられた石碑である。もともと吉州にあったものを、日露戦争後の一九〇五年、日本軍が凱旋の証として東京に持ち去り、靖国神社に放置されていた。ところが、その石碑が運ばれた直後に古谷は、初期記録類の『清正記』『清正高麗陣覚書』などには加藤軍が負けたという記事がないことから、碑文の内容は偽りであると主張した。しかし、その主張は朝鮮史編修会や池内宏らによる朝鮮側の史料研究によって反駁されるのである<sup>20</sup>。古谷の研究ばかりでなく、明治期に行われた文禄の役（壬辰倭乱）関連研究には初期記録類・朝鮮軍記物を根拠として使った場合が少なくないが、それらには日清戦争や日露戦争という時代的な背景のもと、朝鮮併合と帝国主義の鼓吹という目的のために日本側に都合よく使われやすい面があるからであろう。古谷から朝鮮史編修会や池内宏への転換は、それらの記録に対する日本の認識が変わったということ象徴している。しかしながら、このような転換が当時の日本帝国主義への批判としてではなく、かえ

---

いは日韓中の戦争として注目され、度重なって刊行されるが、江華島条約が結ばれた一八七六年、そして日清戦争最中である一八九四年にも各々長内良太郎、鈴木実訳『朝鮮柳氏 懲毖録対訳』、山口勲訳『朝鮮 懲毖録』が出たのは象徴的である。

<sup>19</sup> 北島万次『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』（校倉書房、一九九〇）二三頁

<sup>20</sup> 「北関大捷碑」の事例については北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』（吉川弘文館、一九九六）に詳しい。ちなみに現在は靖国神社より韓国政府に返還され、以後北朝鮮に移送された。

って実証主義的な研究により朝鮮統治を裏づける学問的な根拠を築いていくということの意味したことはいうまでもない。このように一旦、歴史学からの史料批判が始まると、史料的な価値が劣ると判断されるものが酷評されることになった。甚だしくは『太閤記』は史料的な価値も、文芸的な価値も劣るといった評価も現われたのである<sup>21</sup>。

その後、近代日本の大陸進出という観点から注目された『懲毖録』などに対する見方は、日本帝国による朝鮮の強制占領から変化し、主に植民地支配という観点から扱われるようになっていった。徳富蘇峰は『近世日本国民史』一〇〇巻において日韓両国の資料を調査し、『豊臣氏時代 朝鮮役』上・中・下巻を一九二一、一九二二年に刊行した。また、一九二四年には日本参謀本部が『日本戦史 朝鮮役』を編纂・出版するなど、朝鮮植民地化という現実をもとに捉えようとしていた。

このような政治的・軍事的な目的が主流をなすなかで、近代日本の代表的な作家による文禄の役（壬辰倭乱）を題材にした短編小説が現れる。それは、森鷗外『佐橋甚五郎』（一九一三）と関東大震災直後に書いた芥川龍之介『金将軍』（一九二四）である。森鷗外『佐橋甚五郎』は、家康に捨てられた佐橋甚五郎が文禄の役（壬辰倭乱）後の朝鮮使節団の一員となり、日本を訪問するという話であり、芥川龍之介『金将軍』は、小西行長が平壤城で桂月香によって殺されたという朝鮮の説話を巧みに用いた芥川の歴史観が見られる、彼の朝鮮関連の唯一の作品である。

以上の二作品を除いて、近代日本で壬辰倭乱を扱った作品は見当たらないが、当時、植民地であった京城（現ソウル）で青少年期を過ごした中島敦の『巡查の居る風景』（一九二九年六月『校友會雑誌』発表）ように、文禄の役（壬辰倭乱）を一つの素材とし、当時の日本が持っていた二重性と植民地の支配政策の矛盾を指摘したものも存在する<sup>22</sup>。

## 2-2. 現代日本と文禄の役（壬辰倭乱）

アジア・太平洋戦争に敗れた戦後日本社会において、文禄の役（壬辰倭乱）に対する考

<sup>21</sup> 高柳光寿『近世初期の文芸』（岩波書店、一九三四）二五～三六頁参考

<sup>22</sup> 高等普通学校の校庭では、新しく内地から赴任した校長が、おごそかに従順の徳を説いて居た。（今迄居た内地の中學校で、彼が校規の一つとして、獨立自尊の精神を説いたことを、幾分くすぐったく思ひ浮かべながら。）

普通學校の日本歴史の時間、若い教師は幾分困惑しながら、遠慮がちに征韓の役を話した。

—— こうして、秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。

だが、児童達の間からはまるで何處か、ほかの國の話しでもあるような風に鈍い反響が鸚鵡がえしに響いてくるだけなのだ。

—— そうして秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。

—— そうして秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。

中島敦『巡查の居る風景』『中島敦全集 一』（筑摩書房、一九九三）三三三、三三四頁。

え方を再考する余裕などはなかった。また、敗戦国の立場では、たとえ過去の歴史であっても、日本によって引き起こされた戦乱を以前のように扱う名分もなく、文禄の役（壬辰倭乱）への関心は薄らいでいったといえる。しかし、韓国戦争（朝鮮戦争）特需を経て、日本が高度経済成長期に入った一九六〇年代には、再び韓日間の国交再開の論議が活発となり、近世以降の韓日関係の原点である文禄の役（壬辰倭乱）に対する新たな視点を持つ研究や作品が発表された。

文禄の役（壬辰倭乱）を、植民地朝鮮から独立国朝鮮の歴史、あるいは日韓関係史の重要な事件といった把握へと変化し、朝鮮側でも認められる客観的な研究が活性化している。そのような変化は歴史にとどまらず、文化研究や文学研究にも広がっている。各種の文化交流を客観的に理解しようと研究が多くなり、文学研究においても、主に秀吉に関する研究の一環、太閤一代記の研究だという立場から、文禄の役（壬辰倭乱）に関する文学研究へと変わりつつあった。

そのなかで、一九六四年に滝口康彦の『朝鮮陣拾遺』という、先駆的な意味のある短編小説が発表された。『太閤記』に登場する瀬川采女正についての逸話を小説化したものであり、秀吉による無謀な戦争がどれほど日本の人民に苦痛を与えたのかという、反戦意識がこもった作品である。この作品には朝鮮人は登場しないが、秀吉が引き起こした戦乱に対する日本人の立場から提起された批判は、後に登場する関連作品群との関連性を考えると、重要な意味を持っているといえよう。

一九六五年、紆余曲折を経てついに韓日国交正常化が成立した後には、それ以前には見ることがなかった素材と内容で構成された壬辰倭乱関連の作品が続々と刊行された。特に一九八八年のソウル・オリンピック以後、韓国人の海外旅行自由化、そして一九九八年の金大中政権による日本大衆文化開放措置により、両国民の交流は飛躍的に伸び、日本での韓流、韓国での日流が自然に受け入れられるようになった。このような傾向のなかで、文禄の役（壬辰倭乱）四〇〇年を前後して文禄の役（壬辰倭乱）に関する長編小説が次々と現れている。

それらを二〇〇〇年までに刊行された順に略述すると、次の通りとなる。

- 1) 姜魏堂『生きていたる虜囚』（新興書房、一九六六年一二月）：

薩摩焼を作ってきた苗代川朝鮮人部落の成立と変遷を史実的に描いた作品。

- 2) 司馬遼太郎『故郷忘じがたく候』（「別冊文藝春秋」一〇四号、一九六八年六月）：

薩摩焼の沈寿官との出会いを小説化したもの。

- 3) 遠藤周作『鉄の首枷』（中央公論社、一九七七）：

小西行長の苦悩と活動を秀吉に対する面従腹背の観点から構成した長編小説。

- 4) 森礼子『三彩の女』（主婦の友社、一九八三）：  
女性作家の視角から、日本でカトリック殉教者となったおたあ・ジュリアの生涯を描いた長編小説。
- 5) 宮本徳蔵『王使』（新潮社、一九九一）：  
文禄の役（壬辰倭乱）の直前、日本に使節団として派遣された金誠一の活躍と戦死を描いた中編小説。
- 6) 宮本徳蔵『虎砲記』（新潮社、一九九一）：  
加藤清正の鉄砲部隊長として出陣した岡本越後守冨香の降伏と奮戦を描いたもので、沙耶可を主人公にした作品の先駆をなす。
- 7) 小田実『民岩太閤記』（朝日新聞社、一九九二）：  
文禄の役（壬辰倭乱）四〇〇年を記念して、朝鮮に渡った日本庶民の目を通して戦乱の悲惨さを描いた歴史大河小説。
- 8) 神坂次郎『海の伽琴』（徳間書店、一九九三）：  
雑賀衆の鉄砲部隊長として出陣した鈴木孫市郎（後の沙耶可）の投降を描いた長編小説。
- 9) 長谷川つとむ『帰化した侵略兵』（新人物往来社、一九九六）：  
松浦鎮信の鉄砲部隊長として出陣した沙包門の投降と降倭領将沙耶可としての活躍を描いた長編小説。
- 10) 荒山徹『高麗秘帖—李舜臣将軍を暗殺せよ』一九九九年初刊（祥伝社文庫、二〇〇三年）：  
李舜臣を暗殺しようとする藤堂高虎隷下の忍者とそれを阻止しようとする小西行長隷下の忍者同士の対決を描いた異色長編小説。
- 11) 宮本徳蔵『海虹妃』（新潮社、二〇〇〇）：  
朝鮮名門家の娘と村上水軍の武将来島通之との愛と死を描いた長編小説。

以上のように、近代以降の日本において、文禄の役（壬辰倭乱）関連の作品は絶えず生み出されてきた。戦前の森鷗外、芥川龍之介、中島敦などの作家による断続的な創作から、現代では、司馬遼太郎、遠藤周作、森礼子、宮本徳蔵、小田実、神坂次郎、長谷川つとむ、荒山徹など多様な作家が本格的に文禄の役（壬辰倭乱）関連長編小説を刊行している。それも戦乱の歴史そのものや、戦争英雄として知られている武将を描く作品は見られず、戦争が生み出した象徴的な人物や両国関係で現在も意味があると思われる人物を主人公にした傾向があるという点が指摘できる。

## 終わりにかえて

最後に、近世日本の朝鮮軍記物や文楽・歌舞伎作品とは異なる、近現代日本における文禄の役（壬辰倭乱）関連作品の大きな特徴を提示することでまとめたい。まず、その特徴の時期的な変遷について触れておこう。

第一に、日帝強占期まで文禄の役（壬辰倭乱）は、大部分の日本の作家にとって独立した意味ある主題として注目されることがなく、政治・軍事的な目的において見られるのみであった。例外的に、芥川の『金将軍』が独自の光を放っている。

第二に、韓日国交正常化以降、両国民の交流が活発になるにつれ、徐々に文禄の役（壬辰倭乱）を扱った本格的な創作が増える傾向が現れ、それらは主に長編小説の形式を取っている。つまり、近代の文学作品が主に短編小説として描かれはじめたのに対し、この時期になると次第に長編小説へと変化してきたといえる。

第三に、現代日本での傾向として、豊臣秀吉一代記の中の一部として扱われてきた「太閤記」的な立場から完全に脱皮し、文禄の役（壬辰倭乱）自体を歴史小説化している点が挙げられよう。それも加藤清正のように自国の戦争英雄を中心に描くのではなく、韓日関係の中で象徴的な意味を持つ人物、例えば、沙耶可（金忠善）を主人公にした作品が多く<sup>23</sup>、その他、薩摩焼の沈寿官、カトリックの殉教史の一ページを飾るおたあ・ジュリアなどに焦点を当てているという特色がある。

次に作家層を見ると、他分野に比べ、在日韓国人、韓国人と結婚した者、韓国居住経験者など、韓国と深い関係を持った者が多く、最近の主要作品は韓国語にも翻訳出版されている<sup>24</sup>。

また、近代以降の作品の大部分は作家の歴史意識が表われた作品が多く、秀吉に対する崇拜や日本の武将の武功を誇示するような態度は取ってはおらず、むしろ秀吉の侵略戦争に対する批判的な立場が主流を成している。

以上のように、文禄の役（壬辰倭乱）関連作品は時代別に特徴は異なるものの、近世はいうまでもなく今日においても、日本で創作され続けている。近世小説であれ、伝統劇であれ、近現代の短編小説であれ、長編小説であれ、新たなジャンルに見合うように作られ

<sup>23</sup> 二〇〇五年にも江宮隆之『沙也可一義に生きた降倭の将』（桐原書店）などが出ている。

<sup>24</sup> 宮本徳蔵『虎砲記』と『王使』は『왕사（王使）』、小田実『民岩太閤記』は『소설 임진왜란（小説 壬辰倭乱）』、神坂次郎『海の伽耶琴』は『바다의 가야금（海の伽耶琴）』、長谷川つとむ『帰化した侵略兵』は『귀화한 침략병（帰化した侵略兵）』として韓国語に翻訳されている。

てきたのである。それらに加え、これからは映画、演劇、ゲームなどにも文禄の役（壬辰倭乱）の文芸化は拡張され、引き続き行われていくであろうことは想像に難くない。

グローバル時代、東アジア中心時代を迎えた今日において、日韓両国の友好関係はさらにその重要性を増している。文禄の役（壬辰倭乱）は日韓両国、ひいては東アジアのなかにおける自国のあり方を考える上で原点となる、生き続ける歴史として、現代的な意味を持っている。また、繰り返し再解釈せざるを得ないテーマとして、我々の前に存在し続けるであろう。